

2 Trace Register

それは新聞紙と麻布に包まれていて、ツナは固く結ばれたコブを解くのに時間をかけながら出来る限り丁寧に、最上級の客を迎えるようにして包みを広げ、新聞紙を剥がした。新聞紙は二重で、内側は外国のタブロイドだな、とリボーンが言った。

「ヒバリが包みだけ見てたな」

「鋭いなあ…」

本人は無自覚だったにしろ、なんというかその嗅覚には頭が下がる。

「うわー…」

油彩独特の臭いがする。美術館でも同じようなものを見たけれど、額装され、きちんと空間をとって壁に掛けられたものと目の前に剥き出しにあるものとは放つものが違っている。額装されていない方がより生々しく感じられ、何故か隠したくなった。

「なにやってんだ」

「だって、眩しいというか、浮き出しそうっていうか…」

「白いからな」

とリボーンは手帳を手になんと言った。

「いまのところ、作家も不明。使われている絵の具は近代のものらしいが、違う物も混じっているんだそう。キャンバスは古いようだが成分分析の結果は出てねえ。どのマーケットのカタログにも一致しねーし、協会のオンラインリストにもなかった。専属の鑑定家に照合した。現代作家の作品であることは間違いない」腕はいいようだぞ。

「専属いるんだ…」

「当たり前だ」

ツナはリボーンを見、また絵を見る。渡されたときに絵画だろうとは思ったがやっぱり絵で、しかもよくわからない。

「骸の奴、何考えてるんだろ…」

「気になるのか？」

「そりゃこんなことされればさー」

これで骸が何かを伝えようとしても外側からは何一つ読み取れない。リボーンはまあ結果待ちだなと片付ける。見たて手がかりがあるわけでもなく、リボーンも調べはしたが暢気そうに構えている、まったく意味不明なあたり虚仮にされているような気もした。地獄ならまだ良かったのに、と漏らす。リボーンは早くも寝間着に着替え、ハンモックの中で鼻提灯といった具合にきれいに無視だ、そもそも何で絵なんだよ、とツナは文句を言いながら広げたときに同じような注意力をもってタブロイド紙から絵を包み直した。

「そりゃ、オメーが風呂入ってる間、シモンから連絡が来てな」

「え？」

端がきちんと包めなくなり、新しい古新聞でも貰おうかなと思っただころだった。ランボ達は寝ているが母親はまだ起きているだろう、…って連絡？

「エンマが怪我したんだと」

「怪我？ 何で？」

怪訝に答える、リボーンはそうだ、と寝間着と揃いの三角帽をかぶり直すとき毛を整えるように揺らす。

「犬に追い回されて暴走自転車にはねられたらしい」

「えええ？」

「犬っていつでも野犬らしいぞ。お前も気を付けろ」

「あー……うん、それは、気を付けるよ……うん……」

そういうえば雲雀が駆除がどうか言っていたような気がする。それにしても災難だ、前に川辺の猫がどうか言っていたから遊んでいてそんなことになったのかも知れない。

「大丈夫なの？　一緒に課題やろうと思っただけだなあ……」というか、早く言えよ。

そういう大事なこと、ついでみたいに言うなど見上げると、赤ん坊家庭教師様はまたしてもスルーするばかりでなく言下に無理だな、と言いつつくれた。

「当たり所が悪かったから入院だ」

「いつ?!　入院?」

ぴりりと音を立てて新聞紙が破れた。

眠くなりそうな午後の授業は国語で、ツナは頬杖をついて黒板を眺めていた。

ちよんど博物館のところで獄寺が教えてくれた単語が出ており、『ヘキレキ』について先生が話している。つまり、このように突然起こった事件などを――。

「……」

向かいの校舎を歩く風紀委員長の姿が見えた。肩肘張るわけでもなく、悠々と姿勢も良く凛として、考えてみれば育ちの良い、限りな

く自由な人なのだったと思ったりする。

次元が違うと考えれば羨ましいも何もないのだけど、……そういう絵のことについて詳しくあったな。

雲雀に相談したら、彼は答えてくれるだろうか、それとも勝手にしろと無視されてしまうのだろうか、きつと後者なのだろうと思う。絵のことは並盛とは関係なく、ツナ自身のことだ。個人的な問題について雲雀が聞いてくれるとも何かしらの答えやヒントを出してくれるなんて到底考えられない。

「一緒にいてくれたらなあ……」怖いけど。

味方にいると心強いのが雲雀だ。

ちよつとおもしろいというか、理解に苦しむところもあるけれど理不尽も身勝手もリポーンと骸を相手にしていると中和されるというかぼんやりしてくる。なにしろ雲雀はリポーンや骸ほど屈折してない(と、思う)、これはかなり大きい。

「……だから期待もしちゃうんだよ……」

「――何にだ?　沢田」

「はっ!」

「余所見をしない。罰として続きから読みなさい」

「……ハイ」うええ……。

とかいって、思考は授業なんかから離れていたから広げたままの頁で良いのか、前なのか先なのかもわからない、察した獄寺がリアクションで教えてくれようとしたがとても読めず、笑われて日直代わりの雑用をすることになってしまった。

やっぱり雲雀に相談してみよう、と半紙の入った箱を抱えて歩きながらツナは考えていた。

獄寺や山本はなぜか宝の地図と想っていたらしく、特に獄寺はリボンが明らかにしてくれるだろうとさっぱり流すように興味を失っていた。言われたとおりには炎真も休みで、珍しく学校と風紀委員から連名で野良犬注意の通達まであった。出没したという小学校は集団下校になつたらしい、京子ちゃんが心配だったけど、登下校はお兄さんががっちりだろうなと思うと引けて何も言えなかつた。

「失礼しました」

準備室と言われる物置部屋には先生がいて、どかんと届けられた墨汁やら硯やらを段ボールから出していた。来週は書道がある、申しつけられた雑用は一階の用務員室前に業者から届けられたこれらを保管場所に運ぶことだった。他のクラスの日直やツナと同じように居眠りとかで注意された生徒とで一階から二階を行き来した。その間に雲雀とすれ違つた生徒がいたらしく、びびつたと話し合っているのが聞こえた。

「ヤべって思った」

「歩いてるだけで何されつかわかんねーし」

ツナは口にはしなかつたけど何も思わないと思うんだけどな、と心の内で思いはした。雲雀はそんな人間ではない。まあカツアゲとかに遭遇したらすべてをぶちのめして均等に全員から有り金を持って行くタイプではあるけれど。

「……」

顔を上げて時計を探す。まだ時間あつたかなあ、と思うと同時に足はいつも風紀委員長がいる応接室に向かつていた。

我ながら勇気がある、そういえばそんな話まらないことを持ち込むなどがつんと頂戴してしまう可能性を考えていない、一方で怒られてもそれくらいとどきどきはするが、びくびくはしていなかった。しよるか、するのかの間で彷徨っていたけれども、しないで悩み続けるならしといて後悔なりをする方がいい。たぶん。…なんてこと前なら考えもしなかつたよなと思う。

応接室、とあるプレートを確認してから二度ノックをする。入れ、とすぐに返事があつた。緊張しながらドアを開けると段ボールを前に何かを片付けている副委員長の姿だけがあつた。

「どうした？」

「あ、あの失礼します。ヒバリさんは…」

「委員長なら用があつて出かけている」

「お出かけ…ですか…」出入りとかじゃないのか？」

なんだか肩すかしを食らつた気分だ。没収の品の整理をしていたらしい副委員長は文庫サイズの数冊の本の束を手にしたままツナを見、おやという顔をする。

「なにか用が？」

問われてうつと詰まる。来ちゃつてすいませんと頭を下げたくなつた、用という用もなく、ただ雲雀に聞いて欲しくて、相談したくて来るなんて改めて考えるとおかしい。

「あ、いえ、すみません。オレ、何考えてんだか、その、なんか間違えちゃつて…」はは。

作り笑いがうそ寒いことは分かっている。

「風紀委員は並盛の風紀を担う。そのことについてなら生徒の方からの訴えも聞くぞ」

「そういうんじゃない、ないんです…」

じゃあ何だ、という顔を相手は当たり前にする。

「ちよつと、ヒバリさんに相談したいことがあって」

「……」

今度は聞いたことのない単語を耳にしたという顔だ。

「関係ないって言われそうなんですけど、なんかでも、聞いてくれるかなって思っただけ」

あー、でも聞くわけじゃないじゃん、オレの相談なんて、ともう一人の自分が頭の中で盛んにツツコミを入れていた。やっぱいいです、失礼しましたとそそくさと恥ずかしい思いで退散しようとする、呼び止められた。草壁は本を置き、せかせかと忙しく携帯端末を操作していた。チャイムが鳴る。

「委員長はすぐに戻られる。放課後に時間を設けるから終わったらすぐに来るように」

うわあ。

ほんと大したことない相談なんですけど、とは雰囲気的に言えなかつた。

なぜか放課後、沢田、応接室という情報が先生に伝わっており、何をするんだと生徒の噂にもなっていた。獄寺と山本は心配し、付き合おうと言ってくれたがりボンに止められた。なんでこんなことかと思うと足の運びは鈍い。ツナは鞆を肩にいささか重苦しい気持ちを引きずって応接室のドアをノックする。

あれ、と思う。

「？」

手応えもないほど軽い音がして見れば元からちゃんと言っていたようではなかったらしく、隙間が開いて、中が窺えた。実はリボンが先にいたりとか、とそつと覗いてみると雲雀が窓を背にし、校長室よりもきつと立派な机と上等の椅子に座り、文庫本を見ているのだけが見えた。頬杖をつき、委員長様にしては姿勢のよろしくない、不真面目な格好だ。詰まらなさそうに片手で持った本の頁をめくる。

「…っ！」

ちよい待てちよい待てちよい待て。

「ていうか…」

何持ってるの、何持ってるの、何持ってるの。何持ってるの、ヒバリさん！

慌てて身体を引っ込める。なんかカバールフルじゃなかった？

あれ、なんかタイトルに星とハートなかった？ ていうかあのシリウス、ハルが読んでなかったか?! だってオレ持ってるの見せられたよ!!

「……」ごくりと唾を飲み込む。

深呼吸を繰り返して、いまのは幻、と呪文のように呟く。

「オレ悪い夢みてるんだきつとそう…」

あの雲雀が何をどう間違ったって少女小説を読むはずなんかない、だから何かの間違いなのだ。いやいや、読んでいたとしても、それがいまの雲雀のお気に入りだったとしてもそこは趣味で、他者が触れていい領域ではないのだから見なかったことにするのが一番だ。暗示をかける、オレは見えてないし、知らない。

「…誰？」

鋭い声にぎくりとする。

嫌な汗を感じながら失礼しますとドアを開けた、黄色い鳥がふわりと飛び上がり、雲雀は来たのという顔をした。机の横にはその本を含めて積まれた数冊と掌ほどの大きさのスノードームと携帯用ゲーム機が置いてあった。雲雀の横でなければこの存在もありきたりなのだがちぐはぐに見えて仕方ない。

「し、失礼します…」

何から話せば、というか、やっぱり場違いというか、雲雀の前というのは緊張する。何突っ立ってんのと続いて足を動かしはするが、机に近付くこと叱られるような気になっていつてしまう。

「立っててもいいけど、そこ座れば？」

と、示した壁寄りのソファースセットには和菓子と麦茶らしきものが入った涼しげなグラスが置いてある。応接室にこんなものあったつけ、と不思議に思いながらお邪魔しますと、座った。目の前というのも悪いので座る位置はずれたところにした。

「…来客でもあったんですか？」

「違う。それ食べて良いから」

「え」

「急いでね」こつちだつて忙しいんだから。

予想にない恐れ多いもてなしだ、狼狽えるしびくつくけど、食べなぐちゃ。あたふたと手を伸ばす、漆黒の塗りの皿に置かれた和菓子は形はこぢんまりとしているけど上にある艶のある飾りといい、崩すのがもつたいたいし、ほんとうに自分が食べていいのだろうかとも思う。

「う、うま」

なんだこのあんこ、しかも内側に入ったモチみたいなのがあった。

「和菓子の造形は芸術の一つでもある。落雁の型なんかは結構貴重なものもあって、コレクションにしている好事家もいるそうだ」

「ラクガン…」

「横にある干菓子」

確かに皿には花と葉っぱの形をした白っぽいものがあつた、菓子なのかとツナは手に取る。砂でも作ったかのように力を入れすぎたら崩れそうだ。

「で、相談ってなに？」

早速来てぎくりとする。まあ、それもそうだ。

「あの、ヒバリさん、詳しくはからついで来ちゃっただけで、骸の絵のことで…」

「いまのところ情報はないよ」

すぱつと切られた。

「——え？」

「だから、六道骸から君に持ち込まれた絵だろ？ 違法の薬物があるわけでもないし、武器も仕込まれない。いまのところはただの絵だ」

「——え？」

あとは本人を問い詰めないと分からない、と雲雀は続ける。昨日ちらつと包みを見ただけで触れてもいないのにどうしてそこまで調べがついているのか、はつきり言つて分からない以上に怖いです。

「…あの？」

リボンなのか、それとも雲雀の単独でなのかどこがどうなつていゝるのやら説明して貰わないと頭がこんがらがってしまう。もうちょっと詳しく、と続けかけた声は廊下からの足音で無情にも遮られてしまった。

「委員長！」

副委員長が律儀にもドアの外から声をかける。

「西公園で乱闘との報告が！」

黒曜と並盛との境にある公営公園で、フットサルコートと小さな野球場がある。公園の中でも広い方だからケンカも祭りも何でもアリだ、ひええ。

「…猫の？」

雲雀は面倒そうに応える。

「人です！」

入りますと副委員長が言う前に、すでに委員長は窓から飛び立っていった。振り向きもしないその姿ときたら鮮やかすぎる。

良い天気なのについ視線は足先ばかりになる。

「検査だつっーんだつたら仕方ねえつて」 気にすんなよ、ツナ。

「そうですよ」

「うん…」

今日の授業は四時間目までだからと放課後は炎真の見舞いに行った。獄寺と山本も付き合ってくれたが、病室を聞いたところで今日は検査だからしばらく会えませぬね、と言われてしまった。何をそんなに調べることが思わなくてもなかったが、彼らを付き合わせて何時間も待ってられない。後日、出直すことにした。

「らうじさんとかに聞いとけばよかつたなあ…」

ツナが凹むのはそこだ、考えなしに動いてしまつて結果残念になつてしまうことが多いのだ。そもそもそれだけじゃなしに自分的にシヨツ

クなことは続いている。

「ジュリーなんて聞いても答えられませぬよ、きつと」

獄寺はフォローしてくれるが、ツナにとって彼は大事な友達だ、曖昧にしか頷くことが出来なかつた。次は時間も考えてちゃんと行こう、プリントとかじゃなくてお見舞いも用意して。

「…」

あれ？

透き通つた空気の中に、新しい緑が発芽する匂いがした。

いつもの通りを、いつものように通つたはずなのに取り巻く空気が浄化されているような気がした。どこだろう、角を曲がつて、そこに踏み込んだ瞬間にあつと感じた。どこか懐かしいような、気持ちの良い日だまりにでもいるような心地になる。二人はどうなのだろう、見たところ変わりはないようだけど。

「…つと！」

「つ！」

ぼすんと音がして、振り返れば幼稚園くらいの女の子が足下にしがみついている。

この子が匂いを運んだのかなと思った。

「大丈夫ですか？ 十代目」

突然の子供に獄寺は剣のある視線を向けながら、山本の方は

「平気か？」

とツナが子供にかどちらにもつかないような風にかがう。

「あ。うん」

深い赤色のフードを頭に被り、チェックのスカート、靴にはリボンがついていて、まるで童話に出る子みたいだなと思ひながら平気？

と声を掛けるとツナの顔を見もせず、後方を気にするようにツナの服の裾をきゅっと握りしめ、身体を捻らせた。後方からなにか怖いものが来る、そう訴えかけられているように見えた。

「どうしたの？ 後ろ？」

「言わなきゃわかんねーぞ？」

山本がしゃがんで顔を覗こうとするけど、彼女にとつてはそれどころではないらしい。片手ではツナの服の裾をしっかりと握ったまま道路に膝をついては小石で何かを描き始める。

「？」

なんだろう、これ。

「おまつ、お前、これ分かんのか!？」

絵文字のようなそれこそ歴史の教科書にでもありそうな字というべきか、実に抽象的な記号だ。獄寺だけが白く描かれたそれに興奮した声をあげていた。

「……」

ツナと山本は顔を見合わせる。

「えっと…これは？」

「さあ？」

獄寺は手をつき、真面目な顔で解説している、記号は三つだ、さつと描かれたもので押し間違えたスタンプでもこんなにはならないだろうと思えるような形をそれぞれがしている。

「篡奪者？ 来る？」

獄寺の呟きに弾かれたように顔が持ち上がる。フードがずれ、切りそろえた頭髮と顔が露わになった。

「!」

「ユニ…？」

子供はぱつと明るい顔をしたものだが、すぐにはつと後方を見遣り、怯えるようにツナにすがりつく。ツナは未来で一緒に行動した少女が幼くなり目の前に現れたことにただ驚いてリアクションすらとれない。

「君たち」

角から一人の女性が現れた。背後にはディーノみたいに黒い男を従えている。

「え？ あ…」

ツナは女性と少女を交互に見る。少女は何か言いたそうにひたすら首を振っていて、そのときになってやっとこの子は話せないのだと知った。

「その子、返してくれる？」 迷っていたの、助かったわ。

「……」

カエス？

日本語が少し変だ、まるで覚えてみたいな。呆然と聞きながらそんなことを思う。少女は悲しげな目をし、大人しく黒い男に抱き上げられる。ぽかんと置き去りにされたように見送るところだったが、手から離れた小石が着地するのとはほぼ同時にひたりと頭に落ちた、違う。それは違う。

「待…」

「ちよつ待…、何してんだよ!」

ツナよりも早く怒鳴ったのは獄寺の方だった。

「獄寺？」

「十代目、そいつらは篡奪者です、あいつは逃げてる!」

はつきりと言いつ切る。彼にとつての理由はどうあれ、判断は気持ちいくらいで、それに背中を押されたような気がした。

「う、うんっ」

おいおい、と困ったように山本は言ったが、獄寺の真剣な表情にしゃーねえな、とすぐに走り出し、ツナも『サンダツシヤ』の意味も分からぬまま追いかけた。

反対方向からまた男がやってくる。公園の方だ、そちらの方にまで行かないと車は止めておけない。この辺りの道は車一台と自転車とが通るのがせいぜいの幅で、車のすれ違いは苦労するのだ、だから雲雀も徒歩で移動するし、ディーノも高級車を乗りつけてこない。

「わっ！」

三人目の男が素早い身のこなしで黒い男を殴り飛ばし、子供を奪い取る。子供はふわりと着地させられるとうまいこと女のひとの手をくぐりぬけて公園の中に駆けて行った。

「待ちなさい！」続いて外国語が聞こえる、まるで映画みたいだ。

山本はすぐに方向を変える。回り込んで公園内の追っ手を阻むつもりなのだろう。

「こっちー！」

獄寺が武器を取り出そうとするのをダメだから、と制しながら先に行っているだろう山本を捜す。

伊達にここで十年遊んだわけではない、この公園なら知り尽くしている。怪我したり泣いた思い出なんてわんさどあるけれど、隠れたりする遊具や木など見当がつく。

「ユニ！」

ジャンゲルジムとブランコには別の子供が遊んでいた。中央のケヤ

キの下では小学生がキャッチボールをしている。

「獄寺、くんは、あつちの用具倉庫と、木馬のとこ探して…」

流石に息が切れる。これだけ走って転ばないのが我ながら奇跡だと思つた。

「はい！」

ツナは入り口に近い銀杏並木に向かう。段差を設けて落ち込むように砂場を作っており、並木の前にはベンチを置いて、水道の蛇口を二つ並べていた。一見どこも隠れられなさそうであるが、猫避けに高くなった塀とブロックがあるのでかくれんぼでは三人はここに隠られる、子供だけが可能で知っている場所だった。

「ユニ」

砂には子供用のスコップとコップが半分埋まったまま放置されていた。

「大丈夫だから」

守りたかった少女だ。あんなことはもう起こさせない。

「出てきて、いいよ」

間違いのない、いまの世界で。

「……」

ああやつぱり、と思つ。

透き通つた空気の中にあたたかさをたたえている。どこでだつてきつと彼女しかいないのだ、はかないくらい存在感なのに、確かにあると感じさせる強さ。ツナは会えて嬉しいと思つた。年齢も違ふようだし、わずかに彼女の欠片を得た他人なのだろう、あのときは有り難うと伝えたところから分らないだろうけど。

「怪我はない？」

少女はこくりと頷いてからにこりと笑う。動いた反動でかささらさと砂が落ちた、これはまずは母さんだなどちよつと笑う。服で拭いてから手を差し出すと掴まるようにきゅつと握る。ほつとした、イーピンやランボもそうだったけど子供はツナに懐きやすい。考えてみれば赤ん坊にも泣かれたことがなかったような気がする。同じように思われているんだとリポーンには押揃うように言われて微妙な気もするけれど、ここで警戒されないのはありがたい。

「テメーも篡奪者か？」

獄寺の声だ。最後に出てきて黒い男達を殴っていた、眼鏡をかけて一見サラリーマン風だがツナは相手に見えないよう腰を落とし、少女を背後に庇う。

公園には子供達が遊んでいる、揉め事だったら巻き込むわけにはいかない。山本はその辺りを考えているのか何もせず距離を取ってこちらを見ていた。

「いや？ 父親だ」

「父親？」

歯切れの良いはつきりとしたアクセントの日本語で、しかも耳に覚えがある。

「え？」

肩がとんと叩かれた。振り向くと少女が立ち、男を指差して彼は安全といったげに頷いてみせる。

「あ、そうなの？」

ツナが答えるや否や嬉しげに走り出し、ぼすんと男の足下に埋まる。

男は目を細め、少女の頭を撫でると抱き上げて目を合わせた。

「ごめんな」

少女は首を横に振る。全身の信頼がそこにはあつて、他者の意見というものも何もはねのけていた。獄寺とツナは見ているだけしか許されない。男はふと笑うとやつとツナ達を見た。

「初めて会ったような気がしないな、ま、世界に三人はいるっていうのの一人か？」

「……」

あそこの、と山本を目顔で示し、あいつには助かったよ、と洋画の中等などでよく俳優がやっている軽く首を傾げる仕草をする。

「娘が守れた、礼を言う」

少女を抱きながらゆつくりと頭を下げる。獄寺は毒気を抜かれたような顔をしている、ツナもいいと口ごもるように応えながらそうなのか、だよなあと少女とその父親を見ていた。

「この子は訳あつて口が利けない」

「むす…め…」

彼らが居ることが嬉しくもあり、話が出来ないことが惜しいようでもある。だけど話せたら余計なことをあれこれ言いそうで、記憶のない二人を困らせるだけだろう。仮にここの彼らだとして記憶を渡さないのであれば、それは時間の神だかおしゃぶりの判断で、はからいでもあるのだろうか。

二人は仕事でこの街に来ていてしばらくは滞在するとのことだったが、彼女が別の人間達に連れられそうになっていたことについては何も触れなかった。

「…この世界のY？」

「さあ…」

声も姿も似すぎていた。眼鏡をかけ、目の色も髪の色も違ふようだが、

案外ジツリヨネロファミリーに連なるひとなのかも知れない。ここでも何かのゴタゴタを抱えてそで幸せであるようにと願うばかりだ。

「でも、だつたら記憶があるはずだし…」

「だなー」

山本は腕を頭の後ろに組みどこかすつとした顔をしている。野球部の練習もない日に思い切り走れたからだろうか。

「あ。そうだ、十代目」あの騒ぎと宇宙語に気を取られてしまいました。と、獄寺は棒を振り投げるとやや真面目な顔を作る。いつの間にかそんな棒を。

「絵なんですけど、あれから何か分かりました？」

「さあ…」

「オレ、思ったんですけど、骸のやつ、どっかに売り捌くつもりで盗んだりしたんじゃない？」

「え？」いやいやまさか。

公園を出る。空き地からだろう、草いきれの匂いがした。

口ではそう否定したものの、頭の中には轟がかかってへたしたら土砂降りなんかもありそうな気がしないでもない。リボーンはどのリストにもないと言っていた、正規のカタログにもそうでない方にも。絵は、どちらでもあり、どちらでもないといえるグレーな部分にあるのだけだ、案外黒曜にいるクロームたちがヒントを持っているかも知れない。

「ツナ」

と、リボーンがひよいと山本の肩に乗る。

「黒曜ランドが襲撃された」

「は？」

青天の霹靂とはきつとこういうことだ。

ぐちゃぐちゃな頭のまま眠ったらその夜、骸の夢を見た。

\*

骸は、同じ年くらいの誰かと一緒に行動していて、その誰かをツナに近づけようとしなかった。それはまるで今の骸とツナとの位置関係を表している。ツナが触れられない誰かが骸の本心だとしたらツナが何をどう言おうともそれは許されていないということ、骸に對してのことはすべて一方通行になる。何だかんだ言って、素直じゃないけど一緒に戦える仲間と思っていたからそれはキツイ。

「あー…」

起きてみて、脱力感に襲われる。

「ヒバリさんにも、聞けなかつたしなあ…」

リボーンすら黒曜が襲われた理由が分からなかった、もともと手広くやつてるようだしなと溜息を吐いて手を振った。ベッドの下には骸から預かつた絵はあるのに、報せは何もない。

どうしよう。

\*

「……」

病院にすることを余儀なくされた炎真は不運な事故を知ったボンゴレ九代目の計らいでかなりのクラスの病室を与えられていた。それだけであわあ、なのに、たいそうな見舞いがしよつちゅう空輸されるのもうわあな話だった。

後継者であるツナの友人として、過分といつていいほどの目のかけ

方だ。本人としては悪気などなく、孫に甘すぎる祖父宜しきの気遣いぶりなのだが、今日のフルーツのセットもどうすれば。

「……？」

控えめにドアが叩かれたような気がする。

しばらく黙って見詰めてから再びまた小さな音でノックされるのを確認し、どうぞ、と返す。制服を着、気まずそうな顔のツナが入ってきた。

「ツナくん」

入院してすぐに見舞いに来てくれたらしいが検査で会えなかった。とはいえ、炎真も数日はとろとろと寝るばかりで会える状態ではなかったが。

「ごめん。まだ怪我也良くなってないのに。相談できそうなのって言うたら、エンマしか思い浮かばなくて、その…」

ていうか勇気を振り絞って相談しようとした風紀委員長は応接室で読書をしており、怖くて覗てはいけないモノを見てしまったというシヨックと彼の大好きな乱闘騒ぎ云々でうやむやになってしまったと誤魔化すように続けた。

「いまのところ情報はないなんて説明もなく言われちゃってさ…」

シヨックというのもよほど大きかったらしい、そのあたりについても大丈夫かと聞きたいけれど言葉を探すようにいうあたり、言いたくなさそうにも見えた。

「そうなんだ。ううん、いいんだよ。来てくれて有り難う」この前はごめん。

椅子を勧めると焦ったように座るが、心なしか小さくなる。

「……」

「どうかした？ この状態じゃ僕も手伝えること少ないけど、聞くくらいならできるよ」

炎真は真っ直ぐにツナを見、小さく息を吐いた。早くも相手の顔にはありありと後悔の色が浮かんでいる、持ち込んできた相談とやらも濁して終わってしまいそうな気がする。

「ツナくん、平気？」

「こっちの台詞だよ」

弱く笑う。

「アーデル、買い物に出かけてるんだ、もうすぐ帰って来ると思うんだけど…」何も出せなくてごめん。

「あ、や、い、いいよ、おしかけたのはこっちだし…」

両手を振ってあたふたとやるツナは確かに炎真の知っているツナだったがやはり元気がない、手を落とすと小さく

「…聞いてくれればで、いいんだ」

と、言った。

「デイーノさんはイタリアだし、リポーンは追い詰めてくれるような事しか言わないし」

「他のひとは参考にならないの？」

そんなことない、ときっぱりと否定はするが、

「結局はオレに任せるって言うと思うし、何て言うか…やっぱり、分かってくれるというか、エンマが近いような気がするんだよね。オレの勝手な思いこみなのかも知れないけど」

と照れたように言われて炎真もむず痒くなってしまふ。

「—あら」

と足音も立てずに入ってきたのはアーデルハイトで、豊んだタオル

と紙袋を抱えている。

「アーデル」

「あ、お、お邪魔してます」

アーデルハイトは無表情ではあるけれど何か頬を赤らめている二人に責めるより、毒気を失っているようだった。炎真に対しては起き上がるなど叱るところだったのだろう、足の骨と肋骨を折り、しばらくは絶対安静で医者以上に彼女は厳しくなっている。

「やっぱオレ、帰っ…」

「いいよ。話して、ツナくん」

炎真はちらりと視線を遣る、と、アーデルハイトは好きにしなさいとばかりに手を振った。

「う、うん」

ツナは詰まったような顔を見るとアーデルハイトと炎真を見た。

「シモンみんなを巻き込みたくないし、迷惑は掛けないよ」

「……」

「…エンマ」

心を読むかのようにアーデルハイトが先んじて制するかのようには呼び掛ける。

「分かってる」

シモンファミリーとボンゴレファミリーは初代の盟友だ。関係性は濃く、裏切りも仲違いもないとされたが、それだけにその訣別には血なまぐさい陰謀と、痛ましい悲劇を生んだ。きっかけに誰の意思が働いたのかは知らない、あることきっかけに地下に葬られたシモンの力が再び蘇ったとき、守護者同士で闘った。掟に背いたとその清算の戦いは、誇りと命を賭けたものだった。

そこからくりと陰謀があるにせよ、敗者は制裁として存在を滅ワインディチェせ、復讐者の檻に永久に囚われる、とそう約したものであったがツナは囚われることを潔しとしなかった。囚われていたという霧の守護

者の例があったからかも知れない、己の仲間はもちろん、闘った相手をそこに封じるのは、甘いと言われようとも——我慢できなかった。

そもそも存在するのになきものとするのはどうしたっておかしい。1を0に置き換えることくらい変だ。1は1で0は0だと、彼はそう言い切る。そしてそれを体現すべく戦った…ように思えた。

結局は誰かの手のひらの上ではあったのだけだ。

「……」

炎真にとつては、彼と仲良くなれて、それが最上のことだと思っ

だから自分を、ファミリーを救ってくれた友達を助けたい、こんな状態なのが悔しいが、出来る限りのことはしようと決めている。

「骸に預かってくれて言われた物があるんだ」

「霧の…」

ツナはこくりと頷いた。容姿も覚えてはいるが憑依されていた姿で印象も薄い、どこからか呪われそうで手を打ってあの女の子と鳥のひとだとは言わなかった。

「それが、なんか…獄寺くんが言うには盗まれた絵なんじゃないかって」

「盗品？」

炎真の迂闊な呟きはよりそれを深刻に思わせる手助けをしまつたか、みるみるツナは小さくなり、顔は青ざめてくる。

「それ、が、…ヒバリさんまで、どっか、イギリスの？ 警察が来るとか言ってるし…」

リボーンは大事なことほど言ってくれないんだ、と愚痴るようにいう。

「ツナくん、もっと分かりやすく言ってみて」

「……」

詰まったようになる。

「君はどうしたいの？」

「どうしたらいいか分からないから来ちゃったんだよ……」

「逃げにか」

アーデルハイドは炎真の母のようでも姉のようでもあり、当然そのようにしてツナにもキツイ、炎真が敢えて口にしなかったことをオブラートに包みもせずぱつと言った。

「う」

「…絵をどうするか、でしょ？」

ツナは炎真を見上げるとこくりと頷く。その目からして必死に炎真の中から自分に相応しい方法を引き出そうとしているのが分かる。

「うん」

「絵は、盗品とか行方不明になっていて見付からなくなっていた作品をそうと知らずに買おうとその人は法で罪にはならないし、絵も返す必要がないって聞いたことあるよ」

「え？」

不思議そうな顔をする。物は元にあった場所に返すべきだと炎真もそう教えられて育ったから聞かされて納得するようないような奇妙な気持ち悪さを感じたのを覚えている。『善意の第三者』とかいっただけだ。

「父さんが骨董を扱っていたからちよつとだけ聞いたことがあるん

だ」

骨董市場にはそれぞれ所出所が分からないものが多かった。旧家の蔵や、なんとか卿邸宅から出たとしても調べれば数十年前になくなってしまっていたとか、偽造品だったりした。小さい頃、寺だか旧家だかに鑑定を依頼されて家族で半年ほど京都に滞在したこともある。あれは凄かった、見せられたいくつかの品もそうだが、案内役の市の職員に美術鑑定家に質屋ととであちこちに足を運び、あれほど毎日が楽しそうだった父の顔と来たらなかった。

「絵もいろいろあると思う。盗品とか、警察が絡んでくるようなわくつきのものでも、ツナ君がどうしたいのかちゃんと考えて決めるのが良いんじゃないかな」

ツナは黙って炎真の話を聞いていたが、勇気づけられたかのように拳を握ると、うん、と言った。

「そうする。ありがとう、エンマ」

明るくなったツナの顔にほつとした。二人の後ろで話を聞いていたアーデルハイドも安心したようだった。

どうしてこんなことに。

骸は首に手を遣り、溜息を吐いた。仕事の方は片付いているのに、おまけの方がこじれて面倒なことになってしまったようだ、知らなかったものの、相手は厄介な連中ばかりだ。テロ組織にマフィアに、恐らく警察。似ていてこれがそれぞれに違う迷惑を抱えている、がため、適宜な応対が必要だった。マフィアの末路に関していえばどうでもいいのだが、ボンゴレに知られてとやかく言われたくも介入されたくも

ないので骸は屈辱的にも逃げ回る日々を送っていた。

「目立ってしまうのはしょうがないにしても僕はそんなに人気者ではないはずですし…」

「……」

子供が絵を抱え、物言いたそうな顔をするのを、骸は無視して続ける。

「まさか別荘があんなことになるとは思いませんでした、この三日で目まぐるしいほどです」

まるでドラマか映画だ、シナリオライターがどこかに潜んでいるのならいまずぐ書き改めさせるか、亡き者にしたい。

「きみ、捜査官に狙われていたんじゃないですか？」

二十四時間以内に起こったことを頭の中で整理しながら骸は子供の横で寝ている大型犬を見下ろす。留守宅というのは便利なもので、堂々としていれば無断で使っても怪しまれない。この老犬も突如やつてきた二人の闖入者に唸りをあげたものの、いまだでは大人しい。夕食を買いに行つて戻ってきたときなど尻尾すら振っていた。

「……？」

子供は少し怯えたように骸を見、いたかもしれないけど、知りません、とぼそりと返した。

「いい答え方です」

骸は頷く、地下の秘密めいた場所においてその可能性は否定しないということだ。

「……」

黙りこんで絵を抱きしめる、彼にとつては大事なものだ。骸はそれを一瞥し、肘掛けに置いていた手を持ち上げて頬杖をつく。サイドボー

ドに己の姿が映る、そこその質のソファに悠々と背を預けて足を投げ出してはいるが、ポーズではない、考えているのだ。

「あの別荘の悲劇的な終焉にはまだ理由が付けられます。しかし、きみが通ったという教会は…どうも解せない…」

骸にとつては折り返し地点のようなものだった。

絵のことも子供の周囲でも回れば見えてくるだろうと思っていた、たとえ説明の言葉を持たない彼が話さなくとも物が語り出すだろうし、人の営みというのは案外禍福もろともジンクスのように決まり切った周期を描く。

ところが、である。僕としたことがと苦虫を噛み潰したような思いがした、こんなのはアルコバレーノを相手にしたとき以来だ、彼らがあるゆる理と物理法則を超えたとしても、ある程度の予測は出来た、彼らは予想通りに予想を超えるのだが。正直に言えば思いもしないことに教会で骸が見たくないものを見てしまったのだ。

「分からないことばかりです」

本心だった。昨日今日終わるといふならまだしも、昼に見た様子ではまだかかることが確信できた、勘でなく根の深さが感じられる。このまま成り行き任せでは分が悪い、敵を見定めなければ動こうにも動けない。しかし、動くにも情報が少なすぎる。

子どもは犬を見、骸を見、気の毒そうな顔をする

「…誰もいなくてすみません」

と、しおらしく謝る。世話になつていたという教会に行つてみたらもぬけの殻になつていた、そして襲われた。修道院付きなので入ろうとしたが門扉は固く閉ざされて人影も物音一つもしない、一夜で根こそぎ消えたみたいなの、いわゆる夜逃げ同然のがらんとした閑けさだけ

があった。

骸が手を出したのは裏社会に顔が利く男、説得の通じない犬は始末させたが、主の方は殺さなかった。殺すとボンゴレがうるさいからで、仕事を済ませたら撤収、乗り込み方は堂々としたのでカメラでもあれば顔も割れたはずで、警察には不審火の容疑者として、また、屋敷の機密を暴露し、破壊した者として裏稼業の連中からも追われるだろうことは分かっていた。しかし、そういう輩に追われるための別の罠を用意していた。それがどうだ、罠など見向きもせず、一方的な愛をひたすら注ぎ込むストーカーのようになんでこの組織が？と思うようなのやらに追いたてられている。

「……」

そうなのだ、闘牛場の牛のように行き先にあつてはふいうちを受け、攻撃されている。

「…お兄さん」

「やめてください」その声で言われたくない。

教会に行くのに尾行があったとは思えない、偶然にしてはタイミンクも良すぎるし、骸達が訪れるのを待たれていたとした方がしっくりくる。

では、骸達の行動を何が報せた？

衣服に機器類は仕込まれていないし、いまなど好機だろうに襲ってこない。

「きみが師匠とやらと一緒に閉じこめられていたあの別荘の主と繋がっている組織ははっきり言って厄介です。僕はその末端を消し去ってしまおうと思ってました」

寝そべっていた犬がぱたりと尾をひと振りさせる。

子どもははつと視線を外に向けた、静かな音を立てて乗用車が目の前の街路を通過していく。そこその家が並ぶ住宅街の、なんてことない休日の夜に物騒な集団から追われる人間が留守宅に潜んでいるなど露も思わないだろう。

「だから」

と、骸は指を弾く。少年が抱えていた包みは布だけを残して手品のように消える。少年の顔色も同じくしてすつと青さめる。

「絵は安全なところに預けました」

包みだけは残しておいた、あとは有幻覚だ。

「十日もあれば片付くはずでしたから」

先に千種達と一緒に日本に送り、ボンゴレが動くよう仕向けた。子どもは強く骸を睨み付ける。すぐに立ち上がり布を握り駆け出そうとするのを、足でテーブルを蹴ってソファとの間に挟むことで阻んだ。

「っ！」

「待ちなさい」

乱暴は好きではないが、もう一度蹴った。空になったプラスチック容器と紙くずしか乗ってない、割れる音はなかったが、がんと硬く重い音はした。犬が唸り、そして窺うように子どもを見上げる。

「飛び出したら死に行くようなものです」

「……」

安全な場所と言ったでしょう、とゆつくりと言ってやった。

「ここよりも安全です」

「…本当に？」

少年は、みるみる泣きそうな顔になり、骸から目をそらすと小さく呟き悄然と布を抱いた。

「修道院といい、別荘も焼かれましたしね」

骸たちが隠れ家を移動してすぐにニュースで流れた。資産家の別荘が不審火で焼け、主と思われる男の焼死体が発見されたこと、警察は怨みを持つ人間の犯行として捜査しているが、報道しないでいることは多いはずだ。あの地下には邸宅や美術館から消え失せたという絵画が眠っていて、一人の男が贖作を描かされ続けていたのだ。

不思議なのはごろごろ転がっていただろう値打ち物があるあの場所を何故焼いたのかということだ、処分には手っ取り早いが無造作にも置かれた数々はじゅうぶん利用価値のある物だった、彼らにとつて金を焼くようなものなのだ、価値を知らない誰か、あるいは知つていても必要としない誰かと考えていい。

「……」

贖作はあの男がいればいい、とそういうことか？

骸は唇をひとさしゆびの関節でなぞりながら、だどしたら、生かされていると一人言ちる。生かされているとすれば、やはり相手は厄介な方で間違いはない。襲った男の顔と場違いに派手な車を覚えている、がっしりとした体格に左腕には刺青、ヒゲ面で赤つ鼻のモツツアレツラファミリでも幹部クラスの悪党だ。いつだったか資料として目を通したリストにあった。モツツアレツラは穩健に見えて警察に改悛者ゴウケンシャを送り込むし、敵を周囲ごと巻き込んで白昼堂々蜂の巣にするというまるで古のマフィアの鑑ともいえるような集団だ。そして頭が悪い。骸は行状もそうだが、そこが一番気に入らなかつた。

「あの絵は洗淨クリンソウもされない代わりに、焼かれも壊されもしません」

洗淨？ 子どもの口が繰り返す。沢田綱吉に押しつけるようにして預けたのだからまかり間違つてもそんなサービスはしないだろう。

「それにしても襲撃も然り、君は何者ですか？」

まさかマフィアのボスの落胤とかではないですよねえ、と続けるも赤い目をしばたかせ、それからとんでもないというように頭を横に振る。

「アラン、です」そういえば名前を訊いていなかった。

「連中の狙いはアラン、君か、絵なんでしょう」

アランは恐縮するように肩を窄め、思い当たる節がないというように首を捻る。もげるほどだった。

「だけど、大事なものは、もつと他にもありました」

はつきり言う。骸も肯首する。

「確かに。びっくりしますよ、ルーブルの地下にあるはずの胸像があったり、レンブラントが転がっていて、カミーユ・コロー、あのぶんではフェルメールもきつとあったのではないですか？」

口を嚙み、視線をうろろとさせるあたり凶星なのだろう。

「：ああ」

ふと思いついて立ち上がる、アランが握り締めた布を指差し、そうでしたね、と嗤う。

「そういえば、これがあるときには襲われないうだ」

眩しいなと思う。

雨戸は雲雀に壊されてしまっていたが、カーテンを閉めて眠っていたはずだ。：て、いやいや違うし、連休の最終日の午後で宿題やっている途中のはずだったし。分からなくなつて投げ出して、手元にあったマンガをころがったままばらばらとめくっていたところを、確かラン

ボたちがやってきて、ああ、フウ太が転んでちょうど腹の辺りに激突して、がつつと何かがぶつかったのだった。

「……？」

ということはまだか病院、とか？

「ああ、起きたかね、綱吉くん」

「おじい…つ九代目！」

跳ね起きた。どうしたって上等な調度が品も良く配されている広々とした部屋、ツナは天蓋付きのベッドに寝かされている。眩しいと思ったのは窓から差し込む光で、朝の白くて透けるような明るさが一日の始まりを祝うかのように室内に降り注がれていた。

「元氣そうで何よりだ」

ジョウロを手にした老紳士は穏やかに笑い、窓辺にある鉢植えはきら光る粒をはね返している。会うと思うのだけど、輝きが老いを感じさせないのに、年を重ねた者だけが持つ透けそうで深いような瞳が不思議だ。にこりとされればツナもつられて笑ってしまう。

「え。でも急にどうしたんですか、日本に来るなら連絡くれれ…」

待て。

「…？」

胡座をかいて頭に手を遣る、ああやっぱりたんこぶになっている。腹には青痣だろう、氣を失ったのだろうから記憶はないのだけど、なんだこの違和感…。

「つて…」

開いた窓から飛び込んでくるのは鳥のさえずりと陽気な誰かの歌声で、寝めるような声まで聞こえた。しかも外国語だ、たぶん英語ではない。

「これは、ガナツシユだね」

サイドテーブルにはやはり英語ではない雑誌と新聞らしきものが置いてあった、そしてやっぱり外国語の誰かの会話だ。しかも紛う事なき父親である家光の声、…つてことは。

「イ、イタリアあああ〜!?」

分からなくて倒れそう。

「え、ちよちよ、オレ、その…」学校は？ 宿題は？ そしてリボーンは？ ていうか、またボンゴレで何か？

「リボーンから何も聞いてないみたいだね」

九代目は楽しそうに目を細めて言う。まあ彼のことだからなと、ジョウロを床に置くとツナの近くまでやって来る。

「君に予め渡しておこうと思っていたものあるのだよ」

「え…？」

反射的にぎくりとする。また何かあるのだろうかと思えるのはやはりどうしようもないクセみたになつてしまっている。いつの間にかやらドアに立っている守護者のひとがくすくすと笑っていた。

大丈夫、と九代目はやさしく頷く。

「これは危険な物でもないよ。ただの鍵だ。リボーンから話を聞いてこれからのことで役立つだろうと思つてね。使わなくてもいいし、もちろん返さなくてもいい」

「……」

開いた両手に落とされたのは本当に鍵だった。

硬質な冷たさも重さも見たところはツナの知っているただの鍵だ。持ち手があり、先端はピンの凹凸がある。典型的なタンブラー錠で、細やかな意匠が凝っていて、古い館の秘密の鍵というのが似合いそう

な感じだ。

「それをリボンに言付けたらどうせなら、つてジェットを呼ばれて、綱吉君をここまで運んだのだけだ」

「じゅっ…」

もう何も言えないというか、スゲー。

そんなに乗せられてたのか、オレ。全然知らなかった、乗り心地とか味わう暇もなく運ばれたわけか、と大胆かつ惨い家庭教師のニヤリ顔を思い浮かべる。リボンがやることなら帰りはお題クリアを条件に決して楽ではないんだらうなと半分、いや殆ど確信的に思ってしまう。それとも既に始まっているのかもしれない、最初の一步は大きめ。

「苗木のお礼も出来なかったからプレゼントをと思ったんだ。少しでも楽しんで貰えるといいのだが」

「そんな、あれは…」

申し訳なきに畏まり、そんなんじゃないですとベッドの上で平伏する。

母親やハルに京子ちゃんたちで用意したのだ。ツナはただそこにいるだけで、はしゃぐ子ども達の子守で手一杯で、母親たちが種はあれがいいかとか気候が合うかとかあれこれ言うのを聞き流していた。そもそも運ぶ段になって方法が分からなくて、ディーノやリボンに訊きまくり、結局スクアアロが取りに来たのだ。来られてうわあとしれっとしてるリボンを見たが、耳にびんびんくる声はともかく、温泉に入りに来たのだと言いつ張るところなど山本のことといい大概に人が好いと思ったことは内緒だ。

「？ 楽し？」

ばたばたと足音が聞こえる、とはいえ絨毯に音も吸収されて響くほどではない。しかし近付いていて、守護者のひとはすつとドアから離れた。

「親方様！」バジルだ。

「パンツ！」

「ツナ！ 朝飯！」

何故か半裸に手ぬぐいを肩に掛けた父親が入ってきた。

「親方様、まだ途中です！」

追ってきたバジルも同じ格好だった。二人でいったい何をしているのか。

「お前、まずまず奈々に似てくるなあー」

鼻を吸る父。母は元気だし、病気でも何でもなくいまもツナの不在などさして気にもせず、子どもたちのためにオムライスなんか作ったりしてるだろう。父親が涙ぐむ理由など連絡も寄越さず帰って来ない以外にない。

「……」

どこの世界に母親に似て嬉しがる息子がいるというのだ、無視してあたふたしているバジルを見る。九代目はにこにこしている、これが日常とか言わないよなと訝りつつ久しぶり、何してるの、と問うと『カンプウマサツ』です、とはきはきと答えてくれる。

「へー…」かんぷうもとい、乾布摩擦は冬にするもののような気がする。現在のイタリアはツナが感じているところ、寒くない。

「なんかこれがいつもだったら、ほんとすみません…」

ツナは九代目とその守護者に向かって恥ずかしい気持ちで謝る、守護者のひとはどうもツナの反応が可笑しくて仕方ないように見えてな

らないからより穴に入りたい心境だ。ついでにバジルにも心の中でいつかちゃんといろいろなこと訂正するからと詫言しておく。

「家光」

ツナの視線に気付いてか、こほんと紛らわすように守護者の人は言う。

「オレガノから伝言だ」

「うん、何だ？」

代わって九代目が上機嫌な家光に告げる。

「滞在は朝食まで。十時に迎えに来ると」

バジルはきりりと表情が引き締まり、では急がねばと返したが、父親はうっと固まって印籠を出された悪代官みたいな顔だなあ、とツナは思った。

奈々に愛していると伝えてくれ。

本人はカッコイイつもりなのだろうが、なんだその伝言は、と思う。

「もう…」

さて、父親も部下なる女性に無事に連れて行かれ、ツナはすることがない。もしかして自力で帰れとか言わないよな、と呟いて、でもありがちだと己の発想に肩を落とす。

「綱吉」

「はい！」

守護者の人が呼ぶ、緊張するから十代目と呼ぶのは勘弁して下さいと言ったら今度は名前だ、こちらも物凄く緊張して背筋がぴんとして

しまう。

「お代わりは？」

「いえ、もう、いっぱいです」

小さく返すともうか、という顔をする。九代目の守護者の中でも彼は表情も豊かで、九代目ボスに付き添って時々出入りする他の厳つい守護者のひとよりはまだ度合いは少なく済んだ。テラス席は円卓で、差し向かいに座っている九代目も忙しそうだろうにツナに付き合っ席を空けるのも最小限に留めていてくれてるのがよくわかるので、心苦しくもある。こういうときははつきり言った方がいいのだらう、父親のように部下が問答無用で連れて行くなど恐らく有事の場合でしかないのだらうし、鉢合わせなどしたらそれこそお荷物になってしまいかねない。

「あの…」

切り出しかけたところに、老紳士は顔いてみせる。

「本来なら私の守護者をつけたいところなのだが、君のよく知っている人物の方がいいだらう。首を長くして待っているだらうから、送らう」

は？ と返すと、あれよあれよという間に車に乗せられ、ボンゴレの本宅だか別宅なのかから移動させられていた。着替えも用意されていて、しかも堅苦しくなく動きやすい、至れり尽くせりの扱いといい、自分は上物の届け物としてラッピングでもされているような気すらする。いいんだらうかと不思議で一方で逃げたい。テレビの旅番組みたいな車窓の景色からして逃げられないけど。

「ツナ！」

「ディーノさん！」

ロマーリオに黒い部下の皆さんの皆さんも勢揃いで、それが却ってほととする。場所はやはり噴水を取り囲むようにした広いアプローチに常識外れに立派な建物だが、キラキラしたディーノは変わらず俳優裸足のまばゆさで歓待する。

「さっきから恭弥も待つてるぜ」  
「ヒバリさん？」

車寄せの段を上がり、ディーノに促されて邸宅に入る、生活の匂いは一切なく、ホテルのようだ。九代目のところは古の趣を残したどっしり感があつたがこちらはあちこちに空間を設け、洗練さのなかにさり気ない遊び心も見える近代的な雰囲気醸していた。通された部屋は洋風かと思いきや一段高く簾で覆われた箇所があり、畳がうつすら見えるのがなんといいかそのオリエンタルさに感心してしまう。

果たして並盛風紀委員長は二部屋くらいぶち抜いたと思われるダイニングのソファークラセットにどんという圧力を従えて構えていらっしやつた。ツナが会釈するのを群れないので対象外とでもいうようにぶいと顔を背ける。

「……」  
ほっとするような惰気するような複雑な思いに駆られる。ちよつと不機嫌っぽいみたいだ。

「どっか行きたいところあるか？ もれなく恭弥もついてくるけど」  
「…僕は行かないよ」

雲雀の冷たい返答を聞かないとばかりに流してディーノはソファークラセットを下ろす。

「世界を見ておくのも勉強の一つだぜ？」  
「そんなこと後でいい」

「だから、無理だつったる？ それはリボンにでも聞けよ」

ディーノは宥めるように言うとなにが何だかという顔で突っ立つたままのツナに詫びて座らせる。いかにも本革張りといった光沢のソファは座れば沈むでもなく、適度な加減で身体を押し返してきた。何よりも触り心地がまるで違う、呼吸する生地といわれるのも納得できた。

「あ、邪魔だったら…」退散するのに吝かではない。

ディーノは手を振り、話はもう終わってるから、と言った。続けて、どちらかっていうと本当のところはこっちだよな、と容姿に似つかわしくない下卑た笑い方をする。

「こっち」

何の気もなしに繰り返す、そうですか。雲雀はツナをじっと見たがすぐに視線を逸らした。

「こいつ、どーやんのかつて訊きにきてよ」

親指で雲雀をさし、ツナはジュースがいいか？と笑う。水で、と身にそぐわない店に来てしまったみたいだに答えてしまった。水つて。

「ちよ、黙って」

雲雀は低くも素早く言うが、『どうしたらいいかと訊く』など彼の性格からしてびんとこない。

「…？ あ、家庭教師、ですか？」

キヤパローネの若きボスは歯を見せししと意味ありげに笑う。

「まあお前らの兄貴分つつかだしなあ、ツナも知りたいことあったら相談しろよ？」

「黙っ…」

「はあ…」

年上だし、リボーンの兄弟子、その点でもディーノは確かにそうだ。

雲雀にとっても家庭教師もしたことがあるわけだから間違っていない。

「アプローチの仕方とか、男としての作法つてやー」

「黙れ」

ごっつという鈍い音と共に雲雀の武器がディーノの顔に直撃した。

街をぶらぶらと歩きながらも気になるのは雲雀だ、つかず離れずの場所において、暴れていない。それどころか、進入禁止の遺跡群にもフリーパスの野良猫にモテモテだった。今日もロマーリオが運転手であっちに行ったり、こっちに入ったりとしているが雲雀はむすつとしたまま大人しくついてきている。観光客ばかりの大聖堂では流石に見えなくなり、探した。雲雀は中も外も人だらけだと怒っていたが、だからといって破壊衝動には至っておらず、どこからか聞こえてくる鐘の音に空を見上げたりしていた。

「祭りみたいな騒ぎだ」なにあの派手な車。

「これがこじや普通なんだよ」

「この放送は」

「スリの注意と市長の趣味だ」

ディーノは苦笑する。ツナを連れながら歩く兄貴分は楽しそうで、いろんな人から知り合いのように声を掛けたり掛けられたりしていた。少女にキャンディーの包みを渡されたら、花でその子に返し、観光客たちのカメラにも収まり、ガイドに質問してはツナたちに訳して伝え

る。

「ちよつと待ってる」迷子にはなるなよ。

と、通りの向こうに走り去っていくディーノ後ろ姿は頼もしい。

「……」

大聖堂を出て、石畳の坂を昇る。やがて階段になって突き進めば宗教的な何かがあつた場所らしく、記念碑のようなものとベンチが置いてあり、ちよつとした広場になっていた。なだらかな下りになった通りの方には露天がならび、別の車道にはのろろと進む車と中で昼寝でもしているのか車が停まったままになっている。雲雀が言ったとおりの車は派手すぎないか。

ツナと同じように雲雀にとつてもここはアウエーなんだということに探していて気付いた、雲雀のことを何でも知っているし、どこでもやっていけるように思っていたけど違う。彼にも思うように振る舞えない場所があり、そこは知らないものだらけで、大人達や知っている人の手を借りなければならなくなる。当たり前だけど、並盛で何でもアリの権化みたいなひとだからこそ顕著に見えてなんだかことさら感慨深かった。でも、ここでも並盛と同じ優遇さ加減だったりしてもなあ、と思ったりする。

「わっ」

雲雀の肩にいた鳥が上空をぐるりと回って回ってからツナの頭に着地する。

「持つてて」木陰でごろりと横になる。

なんにせよ、雲雀がツナの目に見えて分かる範囲にいて良かった。より遠くなってしまったら、流石だなと思いつながら己との差を噛みしめずにはいられないだろう。

「ツナ、ジェラート」

「あ、はい」

「恭弥も」

「……」

「溶ける前に食っちゃまえよ」

デイーノは鼻に貼った絆創膏すら似合う。

と、ジェラートのせいでもなくぞくりと悪寒が走った。同時にロマーリオが携帯電話を手にする、通話は短い。

「ボス」

「どうした？」

低くなつた声が変わ事を告げていた。

「移動した方が良いな、混乱する前にここいらの警備員にも……」

通りに、どうしてかその姿が視えた。

「骸……」

ど真ん中に立ち止まり、背後を見、駆け出す。誰かを連れているようだった。

「追うよ」

雲雀が飛び出して、ジェラート完食後の紙くずだけがツナに放り投げられる。

「……」

「危険です」

雲雀の後を追おうとして首根っこを掴まれる。デイーノが軽やかに跳ね上がって雲雀の前に立った。

「ダメだ、恭弥」

「邪魔しないで」

慌たしいブレーキ音が聞こえた。反対車線だろうに車が突っ込んできてクラクションが鳴った。危うく商店に突っ込むところだったのだ。車を乗り捨てて逃げようとする人物を通り抜けようとするバイクが拾っていった。

「あれは……」

「知ってるんですか？」

スリの注意と地元の音楽を散漫に流していた放送が切り替わって、女性のアナウンスが流れた。ロマーリオが訳してくれる、ガス管損傷によるガス漏れのため、速やかに避難するように。

「リコッタファミリーだな」

雲雀の腕を掴んだ兄貴分は眉を顰める。ロマーリオは厄介ですが、とだけ返す。雲雀はというと苛立った顔で振りほどけない腕とデイーノをじっと見ていた。

「骸の奴、なんであんなどこに手出してんだ」

デイーノは呻くように呟くと指を弾く。

「……なにそれ」

「元は北アイルランドのテロ組織だ、過激派が母体から分離して裏社会に入り込んだ。教義からくる思想が分裂したと聞いている。本人達はナシヨナリズムとか言っているが国の内紛に頭突っ込むのが好きで、数年前から弱体化して大人しくなつたとは聞いてたんだが……」

噂は本当だったんだと呟く。

「骸！」

広場の前にまるで降りてきたように姿を現す、黒尽くしというどうにも悪びれた格好で、後で飛び出してきた連れはぶかぶかのコートを着ていた、子どもだ。

アナウンスが聞こえる。ひとびとがそれに怯え、不安げな顔をしながら坂を下っていく。通りに乗り捨てられた車に怪訝な顔をする。何が起こっているのだろうかそんなことを話し合っているに違いない。

「待てよ、骸！」

夢の続きかこれは。

「……」

骸はツナの声に振り返ると立ち止まり、追ってきた子供を突き飛ばす。子供は突然のことに対処する暇もなく、コート裾をはためかせながら後方に倒れ、そこへ――

――パンツ！

乾いた音がした。

「恭弥！」

続けて二発、三発と音は続き、雲雀は咄嗟にツナを後方に押し遣ると素早く身を翻し、その中へ入り込んでゆくように飛び上がる。ディーノが追う、そして子供は動かなくなった。

「むく、ろ……」

骸は呆然と立ち竦むツナを見、薄く笑うとどこに抜け道があったのか、煉瓦と物との隙間に隠れて見えなくなる。血痕が石畳に落ちている、当たったか掠れたかした、当たり前だ。

「っ！」

肩が僅かに動いた気がした、ツナは両手を握り締めて子供に駆け寄る。血が流れ、どす黒く衣服を染めている。

「ツナッ！」

鋭い殺気と、素早い影が左頬を掠めた。

――とん。

耳や肩のすぐそばで紙に触れるくらいの微かな音を立ててばらばらと礫のようなものが落ちる。そして、あるものは壁に刺さり、数本は足下に金属製の音を立てる。

「……」

数瞬のことで何が起こったのか分からず、しゃがみ込んだ後、視線だけを向けて見た光景にさらに血の気が引き、分からなくなる。

「ロマーリオ！」

援護していた腹心の部下はディーノの声に心得たというように頷くと、すっとツナの横に立つ。ツナがどこから手を付けなければいいのかわらぬと手だけを握るのを見るとゆっくりとあたたかいですか、と問う。

「……はい」

弱く握り返すのを確かめると、そのまま、とツナを制し、てきぱきとチーフで撃たれた箇所を押さえ、頸動脈に触れる。

「息はあります」

「そうですか……」

子供に触れた手が震えている、怖い、と率直に思った。血の臭いがする。いきなり町中で銃声などそんなヴァイオレンスは端から望んでいないし、いまになって汗が噴き出し、腰が抜けそうだ。

「弾は、貫通しているようです。出血もひどくはない」

「……」

壁に刺さっているのはナイフだ、そして、ツナの頬を掠めていったのは銃弾だろう。こんな小さな子が撃たれて、それでこんな――。

「ですが、触れないように」

怪我はないですか、とロマーリオは問う。声は出さず、頷くことしか

できなかった。

「刺さってねーもん」

と、緊張感のない声がある。のろのろと顔を上げると車道側にラフな格好をした細身の青年が立っている。飾りのようにつけた王冠がきらりと頭に光り、前髪に覆い隠されて目は見えない。酷薄にししと笑う自称王子のベルフェゴールだ。

「ヴァリアー」

反射的にびくりとなる。

「あー。ガキなんか見付けたとこでポイントになんね…」

ベルフェゴールは面倒そうに頭髪を掻くと、ポケットから通信端末らしきものを取り出し、片手で操作し始めた。

「ツナ、平気か？」

ディーノは愛用の武器である鞭で雲雀を雁字搦めにしてやってくる、どちらかというの見えない敵に向かつて立ち向かつていった雲雀を止めに行つたような格好で、争つた形跡も見えず傷はなく、汚れだけがついている。ベルフェゴールを見、何か聞いたそうでもあり、曖昧な顔をした。

「……ヒバリ、さん」

雲雀はディーノやツナたちを射貫くような目で見ている。視線が痛かった、ディーノはそれを無視し、後方の部下達に声をかける。

「医療班の手配は？」

「到着には間に合います」

いかつい二人の男が子供を担架に乗せ、連れようとす。ツナの手もディーノによつてそつと引きはがされた。

「わかった、頼む」

「で、なんでオマエらがいるわけ？」

ベルフェゴールは頭の後ろに手を組み、ディーノの後ろで不機嫌と怒りを露わにしたままの雲雀とツナを見ながら緊張感の欠片もない声を出す。目の前にどんな悲劇的なもの転がっていようと興味があればどうでもいいらしい。

ディーノは振り向いても身体ごとで拒否する雲雀に短い溜息と吐くと、問い返した。

「こっちが聞きたい、ヴァリアーは何の任務だ？」

「……」

どちらともなく互いに笑みを浮かべる。肚の探り合いでもしているような沈黙が落ち、ツナは不安な思いでそれを見詰めていると

「——ねえ」

重く低い声が二人の間に割り入ってきた。

雲雀はディーノの戒めを自力で解き、すたすたとツナに向かつて歩いてくる。向かい合つたままのディーノとベルフェゴールをぎろりと睨むのも忘れない。

「なに座り込んでるの」

早く立てと言いたいのだろう、ツナはあ、と下に手についてどうにか身体を持ち上げる。震えは残っているが雲雀に手を掴まれ、引き上げるようにして弱くだが立ち上がった。

「ツナ！ 怪我はしてないか？ 他もちゃんと調べるんだ」

ディーノが慌てて言う。ベルフェゴールもツナを見ている（たぶん）。

「そんな、怪我なんてたいしたことありません」

声も燃れて情けなくなつてゐるだろうと思つていた、だが、はつきり言えた。雲雀に触れたことで震えも吸い取られたように消えている。

「ダメだ」恭弥、お前は。

デイーノが武器を仕舞いながら寄ってくるのをはね除けるように雲雀はやめてよ、と吐き捨てる。

「触らせてないし、触ってない」

ヴァリアアの自称王子は口元に意味ありげな笑みを浮かべると、せいでい気を付けるんだな、と背を向ける。危ないと思う間もなく走っている車の上を跳ねるように渡り、すぐに路地に消えてしまった。

警察らしい車が続々と到着する。

「……」

ツナの視線を落としたところに黒ずんだ赤い点があつて、排気に金属の焼けたような臭いがして、デイーノと雲雀が誰に診せるのだ、触るのだのと言うのが聞こえていた。

「だから、お前らの方をちゃんと……」

「そんなの。そんなこと言ってる場合じゃないんですよね？」

掠れた声が漏れ出ていた、震えが消えたら浮かび上がってきたのは骸と、子供の姿だ。なにやっつてんだよ、と怒鳴りたかった、なにをしたいんだと問い詰めたかった。シヨクともどかしさと怒りに似た思いがぐちゃぐちゃに入り交じって、言っちゃいけないと思うのに抱えていられない。

「骸は何かしてるんだ……」

それも、誰かが血を流さなければならぬようなことを。

「ツナ……」

「行くよ」

ぐいと腕を引かれる。そういえば雲雀は手を離していなかった。

「え」

「恭弥！」

「あなたは手出ししないで」

冷たく言い放ち、取り囲んだ黒い服の男たちも遠巻きに見る野次馬も無視して歩き出す。

「沢田は僕が持つて行く」

黒服の一人が行く手を阻もうとするが、喉元に武器を突きつけ、静かな殺気と共に退けた。ツナの手を引くが一顧だにせず、声も掛けられない。

「調べて、キャリアかどうかいままでできる限りで確かめておくんだから」

雲雀が視線も向けずに言った言葉にデイーノはハツとして苦むような顔つきになる。

「……」

そういえば、と思う。殆ど手つかずだったジェラートは落ちたままとつくに溶けているに違いない。凧いでいた風がざつと斜め下から吹き上げて通る。湿り気を含んで少し冷たい。

あの、と言いかけたが雲雀が携帯電話を手にしているのが分かり口を噤んだ。恐らく相手は草壁なのだろう、帰る、赤ん坊を呼んでおいて、と指示は短かった。

何もかもぶちこわした、と雲雀は不機嫌そうに言った。

「……」

ああはいすみません、そうですねとツナはわけが分からないなりに思う。

ボンゴレもすごいと思ったが雲雀も負けてないというか、まあブラ

イベートジェットだった。何かこう、次元を間違えている。ツナが踏み入れるようなところではないなとしみじみ思う、このひとが成長したらきつと無敵なのだろう、あの十年後の彼のように。

空港に着くやいなや、車に乗せられて病院だ、ちなみにヴァイオレンスなことはあれ以外に何もなかった。熱も出てないし、とんだ旅行で疲れはいるが、身体はびんびんしている。

自分はあれか、空輸された外来種みたいなものか、と検査されながら思った。見たことのない無機質な建物で、健康診断など比ではないほどの検査をさせられた、白衣を着たひとたちばかりの中で血は三回も抜かれたし、細い管を飲み込んだし、うわんうわんうるさい箱の中に入ったり、注射されて写真とやらを撮ったり。

いったい何なんだろう、どうしてこんなことするんだろうと思っていたけど誰にも聞けず、丸二日その寂しい場所にいた。三日目の朝になって制服姿の雲雀がリボーンを伴って入ってきた。

リボーンは元氣そうだな、と言い、ツナはまあそりゃ元氣だけどの後の言葉が続かなかった。

「どっこも悪くねーぞ」できはともかくな。

「当たり前だよ」ていうか、それは余計だ。  
ツナが寝泊まりしたのは一人用の病室で、ベッドと小さな棚と椅子しかない、リボーンはベッドに飛び乗り、雲雀は窓辺にある椅子に座る。

「調べてみたよ」

そうでしょうとも。

「マフィアだとか、あの人のことも含めてどうだっかっていいんだけど、目の前であんなこと見せつけられて無視するわけにもいかないから

ね」

あ、オレじゃなかった。でも、すごい理屈ですなそれ。  
リボーンは聞いているらしく頷くと、どこまで知っているんだ？と率直に尋ねる。

「え？」なにを？

「山本や獄寺にも教えるが、いまはお前達に説明する」

雲雀は腕を組むと、リコッタファミリーというマフィアの一つの事件について語った。

ある土地の兄弟が成長してAファミリーとBファミリーの構成員となった。互いに不干渉を貫いていたが、血の繋がった兄弟だ、親族として顔を付き合わせねばならないこともある。しかも兄弟には妹がいた、彼女は荒んだ環境にあつてもねじ曲がることなく成長し、学校を出ると都会にある福祉会社に勤め始めた。Aファミリーには兄が、Bファミリーには弟がいたのだが、このファミリーはあることに関しては対立しており、緊迫状態が続いていたのだが健気な妹の幸せを願い、実家においては波風は立たなかつた。数年後、妹はある青年と結婚することになる。結婚の話聞いてもファミリー同士のいざごは持ち込まず、式に参列し兄弟はそれなりに仲良く妹夫婦を祝福した。

「そこまではよかつた」

と、雲雀は足を組む。

妹夫婦は娘が生まれ、幸せに暮らしていた。夫は腕の良い職人で、口数は少ないが手先も器用な努力家で、見事な絵を描いた。何よりも愛し合っていた。ところが。

「夫が失踪した」

均衡が崩れたんだな、とリボーンが言う。

「……」

幸せは呆気なく終わる。

ありふれたことと思つては諦めたりするけど、幸せにしがみついていたとか幸せになりたいとは誰もが願つていいことだ、そうでなきゃ生きてなんかいけない。希望とか期待とか、叶うかどうかは別として欲は、人ならまつとうにあるもので、きつと必要なのだ。

「その人は？」

ツナは咳き込むように問う。雲雀は修復画家の方は分からない、と応え、更に悲劇的なことに、やがて妹が何者かに襲われたとAとBのファミリーの関係は泥沼化したよと、抑揚もなく言つた。

「Aがリコッタファミリーだ、互いに腹いせに妹夫婦を襲つたのかと、幹部にそれぞれの兄がいるからなんだろうけど、食つてかかるようなパフォーマンスも争うためのきつかけに過ぎないだろう」

「Bはモツツアレツラファミリーだな」

リボーンが言う。

「マフィアのなり方つて知ってるか？ 裏稼業なんてのはいわばその道のスペシャリスト集団だ、殺しや盗みのスペシャリストになるために構成員候補は小さな頃から仕込まれるんだ、バックアップがついてな」

「そんなの、なりたがる子なんていないよ」

「だろうな。寄りつきなんかしねんだ、平和に守られてる健全な場所ならな」でも、そんなとこはつかじやねえからな。

リボーンの口調がぐっと大人びたものに聞こえて身体が固まる。

「悪たれでも合格しないと候補なんてならねえし、やがて根を上げるヤツもいる」

「……」

ツナは骸たちのことを思い出し出していた、彼らは好きであんな子供時代を過ごしたわけじゃない、それしかなかつたのだ。

「これはただの確執？」

雲雀が口を開く。そうだな、そこに骸が飛び入り参加したんだ、利権争いつてのものもあるしなと思ひ出したように付け足す。

「なんの利権」

「闇市場」

リボーンの言葉に雲雀は納得したような顔をする、小さな家庭教師はベッドから降りると改めてツナと雲雀を見上げた。

「親や家族、女には手を出さないのが俺達の掟だ、それだけに身内が女に手を出すということの意味がよく分かっている」だから、女を作らない奴もいる。

「同性には？」

雲雀は表情も変えずぎよつとするようなことを訊く。

「ま、本人の嗜好もあるがそういうのは環境がしかるべくそうさせる」応えるリボーンもサラリと。しかも否定しないんだ。

「便宜上、両方つて器用な奴もいるがな」

ツナはもう何と言えはいいのかなのだが、雲雀は冷静にふうん、と顎なんかを撫でている。ツナは割り入るように挙手した。

「骸が連れていた子つて、その妹さんの子供とかなんですか……？」

雲雀とリボーンの答えはハッキリしている、知らない。

「……ええ……」それはない。

「僕には誰の素性とか、そんなのは知らないし、関わるどころでもないけど、邪魔されたつてもあるし、彼らは許さないよ」

そこですか。

「報復を本人以外など面白くも何ともない」僕は認めない。

たとえば、と雲雀は呟くように言う。

「命を扱う者が、常に殺意を向けられていい理屈なんてあるの」

「ヒバリさん…」

「子宮を破壊する正義なんて僕は知らない」

え？

ツナは雲雀を真っ直ぐに見る、視線を受けて風紀委員長はその妹は、自殺したと、死体には何人かに犯された痕が残っていた、と静かに言った。

日本の空は、低く煤けているように見える。

「沢田」

「……」

風が雲を流してる、早いなあ。雲は厚くはないけれど、太陽はその中から出たり入ったりを繰り返していた、追いかけてこどもしてるみたいだなあと呟く。

「沢田」

「はっ！」

振り返る。ドアのところに雲雀が寄り掛かっていた。

屋上でぼんやりしていた、獄寺は心配してくれていたし、山本もどうだったと知っていたのに二人にうまく話すことが出来ないまま放課後になって、さつきりボーンに蹴られたばかりだった。リボーンは一つ溜息を吐くとあっちでのごとは骸のことを含めて獄寺達に話

しておく、と見事な風船に化けたカメレオンに乗って行ってしまい、残されて自分はこんなところにいるのかと（しかしイタリアに残ってもすることがない）考えては下向きになる視界をどうにか切り替えようと空を見ている。

「何してるの」

群れていないので雲雀も武器を取り出さず、それでも届かないところに痛みが残っているみたいになちよつとむつとしている。

「空を見ました」

「……」 見れば分かるという顔。

僕が親切にも聞いてやったのだから本当のことを話したらどうなの、と続いて飛んでくる。間抜けにもばかんと口が開いた、ばかんと。

「何？」

「あ、いや、そのびっくりしちゃって…」

雲雀は暫く黙ってから、何に、と返す。

「骸のこともそうだけど、妹さんのこととか、あの子のことも気になっちゃって…」

考えたところでどうにもなんないんですけどね、と自嘲して笑う。骸から預かったあの絵もきつと関係するんだらうなど何となく部屋で見ていて思った。ちなみに頭にたんこぶを作ってくれたのはこれだ、傷はないけど強打したぶんの白が少しだけ取れてしまったように見えた。気のせいと思うことにしている。

「あ、そうだ」ヒバリさん。

「……」

雲雀はいつの間にかドアからツナに近いところまで移動していた、隣でもないが、数歩離れた位置に座り、鳥をゆびに乗せている。寝る

んだから早く終わらせてとっとと行けということなのか。

「油絵の絵の具って剥がれやすいものなんですか？」

「使い方にもよるだろうけど、簡単に剥がれたら絵にならない」

それもそうだ。

「それだけ？」

「え、うつ、…すいません…ってあ、嘘です、嘘」

とリングでなく身につけていた鍵を見せる。雲雀は詰まらなさそうに視線を上げてから、反射してよく見えない、と言った。ツナは慌てて近寄る。

「イタリアに行ったのは九代目からこれを渡したいからって」

「……」

雲雀は立ち上がって鍵を受け取ると裏に返したり、縦に見たりとやってた。トンファーを取り出してぎょっとしたけど強度を確かめるためか叩きただけだった。

「古いみたいだけど」

言いながら返してくれる、興味を持ってくれたことがちよっと嬉しい。

「隠し部屋とかの鍵みたいですよね」

「どこの？」

「……」

あれ？ そっぴや聞いてない。

無表情に見る雲雀を見返し、どうしよう、聞いてないんです、と答えた。雲雀は目を少しだけ瞋り、怒るというよりもぶつと噴き出した。

「や、あの、今度聞いてみます」

「面白そうなら僕も行く」

雲雀にとつておもしろいならツナにとつては試練の一言だろう、気まずい思いがして笑うことも出来ない。雲雀は行ってあげるから、と言った。

「きみさ……」

「オレ、もつと前にこうやってヒバリさんと話がしたかったんです」

思わず遮って口に出してしまふ。

「そうなの？」

「う。…だと、思います」

雲雀は腕を組んでツナを上から眺めるように見ると、暫く考え、だつたら、と言う。

「君さ、目を覚ましたらどうなの？」

「……」

すみませんと呟くように口にしてた。とはいえ目は覚めているし、眠たいわけでもない。雲雀は苛立ったように襟元を掴むと――

「――っ！」

殴られる、と思いつき目を閉じたが、鼻を弾かれただけだった。手加減のないあたり痛みはあるけど、吸っても血も出なさそうであれと思つてそつと目を開けると視線を合わせてきた。緊張して身体がかちんこちんになる、本当にさ、と相手はどこか呆れるように続け、わからないし厄介でこの上もないと文句を言う。

手が頬に触れた。

「冷たい」

「……」

雲雀の手は滑り落ちるように離れて、ぼんと頭にあたたかなものが乗る、もぞもぞと動くから彼の黄色い小鳥なのだ分かる。

「話まらない顔しないでよ」

「え。でも…」

「早く元に戻って。それくらいの間は許してあげるから」

「ヒバリさん…」

鳥が羽ばたき、頭上で歌う。雲雀はがしがしと頭を撫でながら勘違いしないでよね、とも続けた。

「ときどき、触りたくなるだけなんだ」

「……？」

「僕がおもしろいためなんだから」

まるで自分に言い聞かせているみたいだった、でも、雲雀のおもしろいはもれなくツナにはイタイとかタイヘンとか苦しいとか嬉しくもないものがつきまとうのだけだ。

「はい…精進しま、す」

雲雀はじつとツナを見ていたが吐息すると学ランを翻して行ってしまふ。

「目、覚めます」

がっかりさせたくないと発作的に思い、慌てて背中と言った、反応はないけど聞こえてると思う。

「赤ん坊」

「あ」

いつの間にかリボンが戻り、西向きの手すりに立っていた。いつから見ていたんだろうと思うと気恥ずかしくなるが、雲雀は平然としている。

「沢田を引き受けるんだからこつちの話、聞くよね？」

「勿論だ」

雲雀の口が動く、声は聞こえなかつたけどツナには届いた。

「ばたん。」

空を見上げて触られた頬に手を遣る。雲雀の手の感触なんてさっぱり残っていなかった、でも自分よりも冷たかったなと思う。

「……」

雲間に隠れていた太陽が出てきて照らす。眩しくて手庇を作り遮るようにしながら高く、高く手を伸ばした。

彼の言葉が呪文のように繰り返されている。頭を撫でられた、頬を触れられた。雲雀の声が内側に染み渡った。

「…リボン」

「なんだ、ダメツナ」

「オレには味方がいるんだよな？」

「とびきりのだ」

リボンは今更気付いたのか？と押搦おしかかうように言い、柵から飛び降りるとツナを見てふっと小意地悪くも笑う。

「最強の味方がついたんだ、せいぜい置いてかれないようにするんだな」

「うん」

なんだか嬉しい、いつも前だけを向いてツナなんて一顧だにしない最強のあのひとが、やっと自分を振り向いて見た気がした。

——楽しみにしてる。